

新型 Accord のデザイン

Styling Design of New Accord

奥本 敏之*

Toshiyuki OKUMOTO

内田 智**

Satoshi UCHIDA

重原 裕樹*

Hiroki SHIGEHARA

小林 美絵**

Mie KOBAYASHI

要 旨

新型 Accord は、「Excels in All Areas」をグランドコンセプトに、ユーザの心が豊かで気持ち良く、毎日誇りをもって使ってもらえるファミリーセダンとして開発した。

デザインは全体として「爽快」「先進」「上質」をテーマとし、ファミリーセダンとしての強い存在感や気持ちの良い空間を実現した。エクステリアデザインは「爽快、凝縮」をコンセプトとし、インテリアデザインは「Luxurious Modern Interior」をコンセプトとした。また、それらの特徴をより引き立たせる内外装カラーおよび内装ファブリックを開発した。

ABSTRACT

With “Excels in All Areas” as the grand concept, the new ACCORD was developed as a family sedan that could be used comfortably, and with pleasure and pride, every day.

Organized around the themes “Exhilaration,” “Advancement,” and “Superior Craftsmanship,” the design realizes a comfortable space and a strong presence as a family sedan. The exterior design was based on the concepts “Exhilaration” and “Condensation,” while “Luxurious Modern Interior” served as the concept for the interior design. Interior and exterior colors and interior fabrics were developed to further highlight these characteristics.

1. はじめに

歴代 Accord は信頼性や安全性などで多くのお客様に支持され続け、またお客様の車に対する満足度も毎回高く、特に US マーケットにおいてはミッドサイズファミリーセダンの代名詞と呼ばれるまでに成長している。

今回で9代目となる Accord を開発するにあたり、US のファミリーセダンユーザの車の使い方を調査したところ、過去の調査では、通勤での使用がメインであったのに対し、週末もミニバンではなくセダンで家族と出かける使用頻度の増加がみられた。そうした背景には、ガソリンの高騰や環境意識の高まりにより、燃費性能の良いセダンを賢く利用するお客様が増えていることがわかった。セダンの使用頻度が多くなると、ユーザからは室内空間のさらなる快適性や、使いやすさを望まれたり、少し車のサイズが大きいという声が出てきたことも開発のヒントとなった。

我々は、お客様の心を最大限に豊かにする「Excels in

All Areas」をグランドコンセプトとし、値段以上の価値を感じ、喜んでもらえるように、最適なパッケージと細部にまでこだわりをもったデザインの造りこみで、本物の価値を表現し、積極的に Accord を選んでももらえる、全世界で通用するファミリーセダンを目指した (Fig. 1)。



Fig. 1 Grand concept

* 四輪 R&D センター

** HONDA R&D AMERICAS, INC.

2. デザインのねらい

新型 Accord のデザインは、全体として「爽快」「先進」「上質」の三つをテーマと定めて開発した。

「爽快」とは、Accord の強みのひとつでもある広い室内空間の進化を目指したテーマである。ただ広いだけではなく、視界が広く明るい空間で、ユーザが毎日気持ち良く快適に感じてもらえる空間デザインをねらっている。

「先進」とは、ユーザが直感的にわかりやすく、扱いやすい車であるために、より進んだ技術でサポートし喜んでもらえることを目指したテーマである。新しい技術を新しいデザインで表現すると同時に、人の動作や操作のしやすさもデザインの一部として取り入れ、新しい価値表現をねらっている。

「上質」とは、オーナー自身の満足や誇り、人に自慢できるような車であるために、デザインを細部にまでこだわり、造りこんだ本物の質感をねらったテーマである。

3. パッケージレイアウト

パッケージレイアウトは、燃費などの環境要件に適應したボデー骨格の最適化と、快適な室内空間の継承や新しいセダンの価値を目指した「爽快 Efficient パッケージ」をコンセプトとした。

「爽快」は、フロントガラスのラウンド形状化とフロント

ピラー位置の前方への移動、そしてピラーの細径化と断面形状の工夫により、よりワイドで開放感のある前方視界や快適さの向上を目指した。ホイールベースは、先代 Accord から 25 mm 短縮しているが、着座位置やシート形状の工夫により、ニースペースを 15 mm 拡大し、トップクラスのゆとりある快適な室内空間を実現している。

後席乗員を片側 15 mm 内側に移動した V 字レイアウトと、センタピラー位置の外側への移動により、後席からも視覚的な広さが感じられるレイアウトとし、爽快で新しいセダンの価値を目指した (Fig. 2)。

「先進」は、燃費の向上のために、骨格から見直し空力性能の向上を図った。ボデー全体を絞り込み、センタピラー付近を外側に張り出させ、フロントピラー、リヤピラー位置を内側に移動させた樽型フォルムにすることでボデーサイド面の空気の流れを最適化した。また室内空間を犠牲にすることなく全高を 10 mm 下げ、前方投影面積を少なくし空力性能の向上を実現した。

ボデーサイズは、前後オーバーハングを短縮し、全長を 90 mm 短くすることと、ホイールベースを短縮することで、軽量化による燃費向上、そしてファミリーカーとして扱いやすいミッドサイズの最適パッケージをねらった (Fig. 3)。

「上質」は、大人四人が快適に過ごせるゆとりある空間の実現や、トランクフロアにおいても、徹底したこだわりを持ち、凹凸の少ないフラットな造形にすることで、高い品質が感じられるようにした。

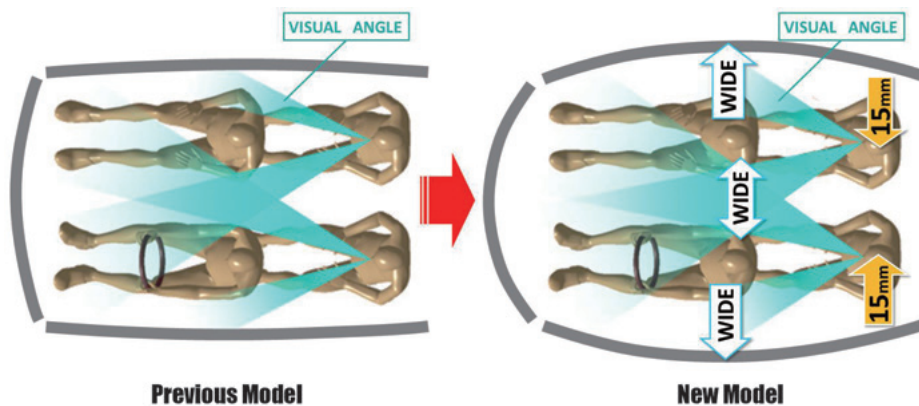


Fig. 2 Passenger layout

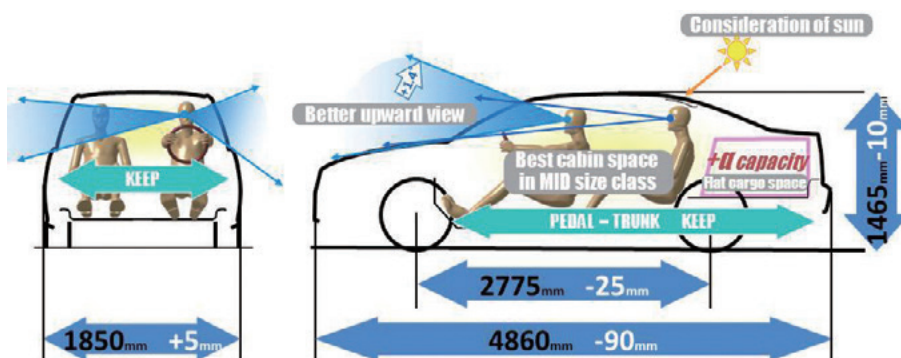


Fig. 3 Package layout

4. エクステリアデザイン

エクステリアデザインは、「爽快，凝縮」をコンセプトとし、ダイナミックで知性的な存在感のあるスタイリングとした (Fig. 4)。ここでいう「凝縮」とは、ボデー全体に面の連続性がありながら、力強く引き締まった躍動感のある彫りの深い造形を表している。

「爽快」は、細いフロントピラーや低い位置のベルトラインでガラスエリアを広く見せると同時に、三次元曲面ガラスを採用し、全体に大きくラウンドしたイメージを強調することで、室内空間の広さや快適性が外観からでも感じ取れるデザインとした。

「先進」は、フロントグリルとヘッドライトに連続性を持たせた構成とし、横方向に広がりのあるワイドで精やかな新しいフロントフェイスとした (Fig. 5)。ヘッドライトには、プロジェクトタイプを標準で採用するとともに、上級グレードの TOURING には LED ロービームを初採用し、精かんで先進性をアピールできるデザインとした (Fig. 6)。



Fig. 4 Exterior design concept



Fig. 5 Front design



Fig. 6 LED headlight



Fig. 7 Bumper design



Fig. 8 Final rendering

前後バンパ下端にはメッキバーが浮いて見えるような構成でデザインし、新しい軽快なスポーティ表現をねらっている (Fig. 7)。

「上質」は、ノーズからトランクにかけて水平基調にボデー骨格を創りあげ、力強いダイナミックさや、伝統的なセダンらしい車格感を感じられるようにした。大きく見せたキャビン廻りは、車の重心の高さによる不安定さやボデーサイズの小ささを感じさせかねないが、ノーズからキャビン、キャビンからトランクへと連続性のある造形にすることで、一体感のあるしっかりとしたフォルムとしている。加えて、厚みのある力強いフード、トランク造形により、上級車のような車格感を表現している。

ボデーサイドには、彫りの深いネガ面から構成されるシャープな2本のキャラクタラインをあたえとともに、力強い前後フェンダの張り出した造形で、ネガ面からポジ面へと変化する躍動感のある上質で立体的なサーフェスを創り出している (Fig. 8)。

リヤビューでは、キャビンからトランクへと絞り込んだ

面と、リヤフェンダの張り出した面構成で、タイヤがしっかりと大地に踏ん張って見えるスタンスを強調し、上級車のような車格感を表現している。また大型化したトランクリッドランプや、リヤコンビネーションランプのグラフィックに繋がったメッキガーニッシュの構成で横基調を強調し、幅が広く安定感のある存在感を表現した (Fig. 9)。



Fig. 9 Rear design

5. インテリアデザイン

インテリアデザインは、「Luxurious Modern Interior」をコンセプトとし、爽快で気持ちの良い空間と見やすく使いやすいインタフェースや、高い質感をわかりやすく表現した (Fig. 10)。

「爽快」は、インストルメントパネルをシンメトリかつ横基調による横への広がりを感じられるテーマにした上で、乗員が走行中にさらされ感を感じない造形ボリュームのバランスを考慮し爽快感を演出した。また、ドアライニングの表皮部分を上部まで廻り込ませたスタイリングにすることによって、肩廻りの解放感を表現したデザインテーマとしている (Fig. 11)。

「先進」は、インストルメントパネル上方エリアに表示系を配置し、見下ろし角度や視線移動を少なくすることで、より見やすい表示系とした。操作系は乗員からのリーチを近くし、空調やオーディオコントロールなどを機能別に分けることによって、よりわかりやすく、より使いやすい操



Fig. 10 Interior design concept

作系にしている (Fig. 12)。

インストルメントパネルの中央部に配置した大型 8 インチセンタディスプレイには、燃費情報、オーディオ情報、運転支援情報等の多彩な情報を表示できる。加えて、表示画面をシンプルなグラフィックデザインにすることで、走行時の瞬間認知性にすぐれた機能的な先進インタフェースとしている。

オーディオスイッチには新たに「オンデマンド オーディオ」を採用している。これは操作性を追求したタッチパネルモニターであり、必要なときに必要なスイッチだけを最適な大きさに表示し操作することができる、直感操作に優れたインタフェースデザインで、先進性と使いやすさの向上をねらっている (Fig. 13)。

コンソール廻りは、乗員がポータブルデバイスをスマートに楽しむことができるように、USB ジャックをアクセスしやすいフロントトレイ内に新たに設置し、使いやすさの向上をねらった。

「上質」は、インストルメントパネル上部やドアパネル上部にソフトパッドを多用し、なおかつ乗員の目につきやすい所に効果的に加飾を施し、インテリア全体の質感の向上を図った。機能部品には、加飾として昼夜問わず光を反射



Fig. 11 Interior design



Fig. 12 Interface concept



Fig. 13 On-demand audio

するクロームメッキをあしらうことで認知性の向上や高い質感をねらった (Fig. 14).

コンソールサイドには大胆な大型加飾を入れるなどをして、ミッドサイズセダンとしての車格感を表現した。リアアウトレットの位置は後席乗員がより快適に過ごせるように上方に配置した (Fig. 15).

シートデザインについては、先代 Accord に対してステッチなどを効果的に使用し、質感を向上させている。シートバック中央部は、くぼんだ形状のデザインとし、乗員がより良いフィット感を得られるようにしている (Fig. 16).



Fig. 14 Chrome plating



Fig. 15 Console design

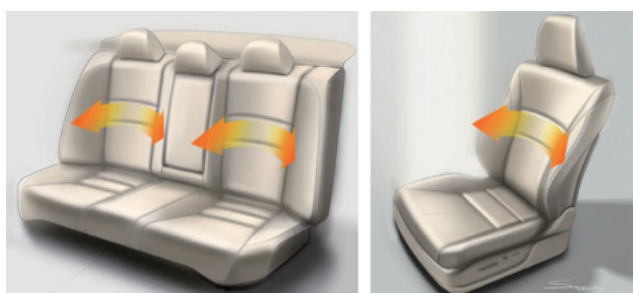


Fig. 16 Seat design

6. カラーおよびファブリックデザイン

6.1. エクステリアカラー

「LIQUID TENSION COLOR」をコンセプトに、液体の表面に見られるような緊張感や張りのある質感をねらった (Fig. 17). ファミリーセダンらしい落ち着きのある有彩色を組み合わせたキャラクタカラー 2 色と、時代にあわせ進化させたスタンダードカラー 2 色の新色 4 色を含む、トータル 8 色のカラーラインナップを設定した.

キャラクタカラーの HEMATITE M. と CHAMPAGNE FROST P. は、細かい粒子の光輝材に 2 色性のある微量のパール顔料を配合し、色味に複雑さをプラスした. CHAMPAGNE FROST P. は、明るいアイボリーの中に柔らかなブルー味を感じさせ、HEMATITE M. は、正面色がグリーン味を帯び、底色はグレーになるよう設計した.

進化させたスタンダードカラーの MODERN STEEL M. と OBSIDIAN BLUE P. は、過去モデルからの色の方向性をじっくり考察し、色味の吟味を重ねた. MODERN STEEL M. は、高い質感を表現するため、従来よりも細かいアルミフレークを使用し、トレンド方向である赤味追加と明度ダウンを施して、シックな雰囲気と力強い立体感を表現した. OBSIDIAN BLUE P. は、いかに青くて深みがあるかという点を追求し、従来よりも彩度の高い干渉パールを使い、暗く深みのある底色から、ハイライトの鮮やかな青味までの美しい色変化を表現した (Fig. 18).



Fig. 17 Exterior color concept

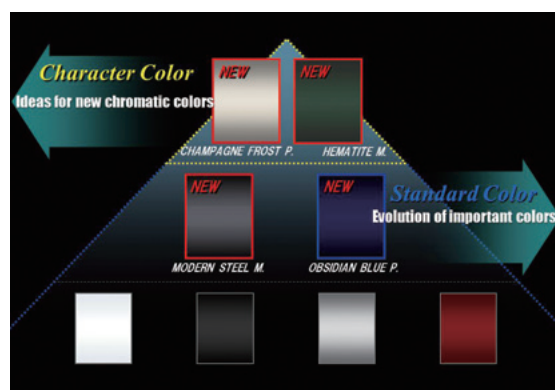


Fig. 18 Exterior color line-up

キャラクタカラー、スタンダードカラー双方の新色で表現した、上品さと進化した質感でスタイリングの存在感を一層際立たせることができた。

6.2. インテリアカラー

「Premium Harmony」をコンセプトに、品を感じさせる明るいアイボリー内装をはじめ、グレー内装、ブラック内装の三つの統一感のあるコーディネートを設定した (Fig. 19)。

アイボリー内装とグレー内装では、従来の同系色よりも彩度を抑えることでクリーンで上品な印象を高めた。いずれもスタンダードカラーのリニューアルとなる。

LX, EX, EXL の基本グレードでは、三つの内装色を設定し、新規追加の SPORTS グレードにはブラック内装とアイボリー内装の二つの内装色を設定した (Fig. 20)。

乗員が安心感や上質感を感じられるよう、ソフトパッドをドアライニング等の身体に触れる部位に追加し、よりソフトな感触や質感の向上をねらった。また、質感の高さをより感じられるようにステッチを増やし、随所に高輝度のシルバー加飾やメッキを小面積で使い、上品で上質なマテリアルコーディネートをおこなっている。

インテリア全体に配置した革シボは上質かつソフトな質感をねらい、革本来がもつ自然な風合いと立体感を表現する素材開発をした。インストルメントパネルとドアライニング上部は、表皮巻き製法を、その他の部位全般はエッチング製法をほどこし、部品ごとの製法差を考慮し

たシンプルなシボ構成にし、インテリア質感の統一性を高めている。

加飾は、質感の向上をねらった塗装加飾と、同じ金型でバリエーション展開できるフィルム加飾の2パターンの、トータル3タイプのラインナップ設定とした。

LX グレードに設定の METAL MESH は、メッシュ調の細かく乱反射をさせたシボにメタリック塗装をおこなうことで、塗料のクオリティだけに頼らない高輝度の金属調の塗装加飾である。

EX, EXL グレードに設定の SELENITE BROWN は、鉱石の結晶のように感じられるパターンとダークブラウンメタリックの色を組み合わせ、木目でも金属でもない新しい価値のテクスチャーを実現したフィルム加飾である。SPORTS グレードに設定の FULLGLOSS DOT BLACK は、シャープな印象のフルグロスブラックをベースに小さなシルバードットの組み合わせで精緻さを表現したフィルム加飾である。

シートトリムファブリックは、LX グレードにダブルラッセル、EX グレードにベロア調トリコットとし、安心感や厚み感のあるファブリックを設定した。SPORTS グレードにはシャープな印象を高めるソフトウィーブを設定した。EXL グレードのレザーは、従来のギャザ表現からパーフォレーションへ変更し軽快さを表現した。加えて、グラデーションパーフォレーションを、広がりのあるシートパターンデザインに追従させ、インテリア全体にテンポを生み出している (Fig. 21)。



Fig. 19 Interior color concept

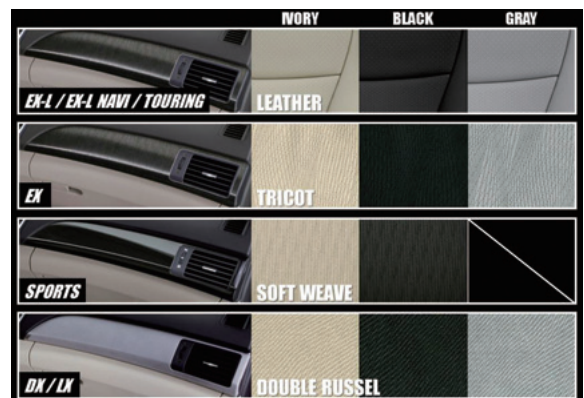


Fig. 21 Fabric design



Fig. 20 Interior color variations

7. まとめ

歴代 Accord は、その時代ごとに変化し続ける社会環境やお客様の気持ちを反映した商品を作り続け、多くのお客様に支持され愛されてきた。

今回で9代目となる新型 Accord も、大きく変動する社会環境によるお客様の気持ちの変化や期待に応えるために「Excels in All Areas」をグランドコンセプトとし、積極的に Accord を選んでもらえる、全世界で通用するファミリーセダンを目指した。

デザインはユーザが毎日気持ち良く快適に感じてもらえる「爽快」と、より進んだ技術でユーザが直感的にわかりやすく喜んでもらえる「先進」、そしてデザインを細部にまでこだわり造りこんだ本物の質感をねらった「上質」、この三つのテーマを具現化することで、より多くのお客様の心が最大限に豊かになっていただけると信じている。

今後も社会環境がどう変化しようとも、社会と人と車の「調和」を目指した Accord が進化し続け、愛され続ける存在になることを願っている。

■ 著 者 ■



奥本 敏之



重原 裕樹



内田 智



小林 美絵